台大日本語文研究第 17 期
2009 年 6 月，頁 115-134
2009-05-22 收稿，2009-6-22 通過刊登

日本與台灣的接觸
—以日治時期來台之中山二郎為例—

王敏東*

摘要

歷史研究重視“文獻”，而其中的“獻”乃指賢明的人。因此透過對耆老的訪談，記錄年長者的經驗及記憶常爲歷史研究的方法之一。

人物研究應找尋可代表大多數人真實生活面的代表性人物。

另一方面，日本與台灣接觸最緊密的時期是日本統治台灣的 51 年。

本文基於以上三個角度，以日治時期來台之中山二郎爲例探討日本與台灣的接觸軌跡。以中山二郎長子中山恒義口述內容，及現存當時的報紙、人事資料等爲依據，審視中山二郎的一生，因而可進一步了解台灣自日本明治時期歷史所居的位置，增進對這個時代的認識。

關鍵詞：人物史、北海道、台北帝國大學

* 銘傳大學應用日語學系教授

Track of Contact between Japan and Taiwan in Japan-Colonizing Period
—On Life of Nakayama Jiro in Taiwan—

Wang, Ming-tung*

Abstract

Historical study emphasizes interviewing experienced elders to explore historical events. Interviewing knowledgeable persons is commonly adopted in related studies.

The candidates to be interviewed should be the one who reflects the common life of most people in the studied time period.

Additionally, Japan and Taiwan was closely related for 51 years in the Japan-Colonizing Period.

Based on the above three aspects, this study profiled the life of Nakayama Jiro, who came to Taiwan in the Japan-Colonizing Period. We interviewed Nakayama Tsuneyoshi, the oldest son of Nakayama Jiro, and reviewed the available literature to collect data. With the present profile as demonstration example, we can have more in-depth understanding to the people living since the Japan Meiji Era and to the status of Taiwan to Japan in that particular time period.

Keywords: Biography, Hokkaido, Taihoku Imperial University

* Professor, Department of Applied Japanese, Ming Chuan University

日本と台湾との触れ合い
—日治時期に台湾に赴任した日本人中山二郎を例として—

王敏東*

要旨

歴史の研究では従来“文献”が大事にされている。この“献”は賢明な人のことである。それがゆえに、長老のインタビューなどを通して、年配の方の経験や記憶を記録するのは常に歴史研究に採用される手段の一つである。

このような人物に関する研究では、さほど知られていない人の方こそ、より多くの人の真実を反映していると思われる。

また、日本と台湾との関係において、その触れ合いが最も密接であったのは何と言っても台湾が日本に統治されていた 51 年間である。

以上の理由から、日治時期に台湾に赴任した中山二郎という日本人を例として、日本と台湾との触れ合いについて探ってみたい。具体的には中山二郎の長男である中山恒義の口述した内容と、現存する新聞や関連の人事資料などをあわせてまとめる。この中山二郎の一生を辿ることによって、日本における明治期以降の歴史、とくに台湾の置かれた状況を究明し、たとえば日本語学科の学生がその時代に対する理解を深める上で役立てたい。

キーワード：人物史、北海道、台北帝国大学。

* 銘傳大学応用日本語学科教授

日本と台湾との触れ合い
—日治時期に台湾に赴任した日本人中山二郎を例として—

王敏東

一、はじめに

歴史の研究では従来“文献”が大事にされている。“文献”における“文”は一般によく知られている書籍などのことで、“献”は賢明な人のことである[1]。それがゆえに、長老のインタビューなどを通して、年配の方の経験や記憶を記録するのは常に歴史研究に採用される手段の一つである。

人物に関する研究には、いわゆる成功した有名人をテーマとした研究が多い。もっとも、世間でそれだけ名高いということは、後世に与える影響も大きいに違いないが、さほど知られていない人の方こそ、より多数の人の真実を反映しているのではないか。

また、日本と台湾との触れ合いが最も密接であったのは何と言っても台湾が日本に統治されていた 51 年間である[2]。この部分についての研究は、日本ではあまり重要視されていないが、台湾ではごく最近注目されつつある。

以上の 3 つの角度から、日治時期に台湾に赴任した中山二郎[3]という日本人を例として、日本と台湾との触れ合いについて探ってみたい。具体的には中山二郎の長男である中山恒義[4]の口述した内容[5]と、現存する新聞や関連の人事資料などをあわせてまとめる。この中山

---

[1] たとえば『康熙字典』に「《書·益稷》: “萬邦黎獻”。《傳》: “獻，賢也”。《爾雅·釋言》: “獻，聖也”。」、『大漢和辞典』（1966）に「賢人。賢に通す。〔説文通訓定聲〕獻、叚借為賢。〔爾雅、釋言〕獻、聖也。〔傳〕獻、賢也。〔皇疏〕獻、賢也。」、『日本国語大辞典』（2001）に「賢人。「賢」に通じる」、教育部『重編国語辞典』に「賢人、有才德的人。『書經』（益稷）の「萬邦黎獻，共惟帝臣。唐 韓愈『處州孔子廟碑』の「乃新斯宮，神降其獻，講讀有常，不誡用勸。」とある。

[2] 1895～1945 年。以下「日治時期」。

[3] 本稿においては、文全体の流れなどを考えたうえ、直接引用の場合を除き、「氏」などの敬称を略す。

[4] 北海道大学教授（1986～2008 年）、その間工学部部長（2004～2006 年）を務める。アメリカ物理学会フェロー、英国物理学会フェロー、現在北海道大学名誉教授ならびに財団法人豊田理化学研究所常勤フェロー。

[5] 2008 年 12 月 7 日に筆者によるインタビューならびにメールでのやり取りに基づく。

二郎の一生を辿ることによって、日本における明治期以降の歴史、とくに台湾の置かれた状況を究明し、たとえば日本語学科の学生にその時代の理解に役立てたい。

二、中山二郎という人物[6]

中山二郎は、現在のサッポロビール株式会社のルーツである札幌麦酒醸造会社の創設にかかわった中山林二郎の次男として 1908 年（明治 41 年）札幌市に生まれた。サッポロビールの発祥は、明治時代の 1876 年[7]に札幌の地に作られた国策会社である開拓史[8]麦酒醸造所までさかのぼることができる。この麦酒醸造所は 1886 年民間に払い下げられ、翌年札幌麦酒醸造会社が設立された。一方、東京では 1887 年、現在の東京恵比寿の地に、日本麦酒醸造会社が設立された。1906 年には、札幌麦酒、日本麦酒、大阪麦酒の三社が合併され、大日本麦酒株式会社となった。このように父親の林二郎が北海道に移住したきっかけは、日本政府が北海道の地場産業擁立のために開拓史麦酒醸造所を設立したことに深く関係している。林二郎は長野県高遠藩の士族中山玄高の長男として 1870 年に生を受け、現在の東京工業大学の前身である東京職工学校で電気技師になるための高等教育を受けた。林二郎はその後、恵比寿にある日本麦酒醸造会社に勤務したが、三社合併に伴う札幌での工場設立にかかわることになり、30 歳前後に北海道に移住することとなり、技師長まで昇進したが、53 歳で亡くなっている。

高遠藩は、江戸時代末期は内藤家を藩主にもつ三万三千石の小藩

---

[6] この節の内容は主に注 5 に提示した中山恒義のインタビューにより、筆者がまとめたものである。関連の資料は筆者により調べ、注などの形で加えた。

[7] ちなみに、同じ年に札幌農学校も設立された。札幌農学校は、明治初期に北海道の札幌に置かれた教育機関で、日本初の学士授与教育機関でもある。札幌農学校は、札幌、ひいては北海道の開拓の歴史と密接につながっており、札幌の発展に伴って規模も拡大し、東北帝国大学農科大学、北海道帝国大学、そして、現在の北海道大学へと発展した。現在、観光スポットとして有名な札幌市時計台は、この札幌農学校の演武場として建てられたものである。
（http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9C%AD%E5%B9%8C%E8%BE%B2%E5%AD%A6%E6%A0%A12008 年 11 月の調査）また、『新撰 北海道史』（1936：204～205）に札幌農学校が明治 28 年（1895 年）文部省転管、明治 40 年（1907 年）農科大学に昇格して東北帝国大学の一分科に列したことについて言及されている。

[8] 史の意味は現在の庁のようなものである。

であったが、中世から江戸末期まで歴史的に重要な地位を占めている[9]。初代藩主保科正光は第二代将軍徳川秀忠が側室[10]に産ませた幸松こと保科正之を養子に迎え養育し、正之にその家督を継がせた。秀忠の死後、第三代将軍家光はこの謹直で有能な異母弟をことのほか可愛がった。家光の死後その遺命により、甥の第四代将軍家綱の補佐役として幕閣の重きをなし、文治政治を推し進め名君として名を残すことになる。

大日本麦酒株式会社は、日本にビール・ブームが起ったこととも重なり大きな成功[11]を納めることになる。当時の社員のボーナスは年俸の倍近くあったという。これにより中山林二郎は当時北海道に数台しかなかった外国製自転車やカメラ、時計などを購入したり、土地不動産を札幌市ばかりでなく北海道の各地方都市にも購入するなど大変裕福になった。林二郎が 1923 年に亡くなった時、中山二郎は 15 歳であった。長男中山太郎は当時の法律に従い 20 歳で家督を継ぐことになった。

高遠藩が大変教育に熱心な藩であった[12]ことは中山家にも受け継がれた。家督を継いだ長男太郎は東京の明治大学を卒業、次男二郎、三男林三郎、五男雅裕（まさゆう）[13]は北海道帝国大学農学部を卒業した。学資は父親林二郎が残した多くの土地の借地代により賄った[14]。当時の大学進学率が数%という時代にあって、母子家庭の四人の子息がすべて大学教育を受けたことは特筆に値する。

中山二郎が北海道帝国大学を卒業した 1931 年は世界大恐慌の真っただ中にあり、大変な就職難であった。林学専攻であったため、

---

[9] yahoo 百科事典
（http://100.yahoo.co.jp/detail/%E9%AB%98%E9%81%A0%E8%97%A9/）

[10] 正室は織田信長の妹お市の三女於江与。

[11] 『新撰 北海道史』（1936：125）に「麦酒製造は九年（1876 年）醸造所成りて、製品は早くも東京の市場に売られて居り…」、同書（1936：197）に「札幌麦酒株式会社が大日本麦酒株式会社の支店として組織を新たにしたのは三十九年（1906 年）のことである」と触れられている。

[12] たとえば『大辞泉』
（http://dic.yahoo.co.jp/dsearch?enc=UTF-8&p=%E9%95%B7%E9%87%8E&dtype=0&dname=0na&stype=0&pagenum=1&index=15184413685000）に「長野　中部地方中央部の県。信濃（しなの）国にあたる。明治期から養蚕県・教育県として有名。」とある。

[13] 四男新四郎は幼少にて死亡。

[14] 父親は 53 歳で病気により亡くなった。

宮内庁所管の森林局に就職しようとしたが面接で落ちた[15]。結局、樺太（サハリン）営林署に就職し、そこで三年ぐらい勤めることになった[16]。長女弘子は樺太で生まれている。当時樺太にいた多くの者は恵まれた階級の者でなかった[17]。幸いにも北海道帝国大学において講師の席が空き、そこに三年前後勤めることになる。そして、台湾との結縁は 30 歳になった 1938 年のことであり、台北帝国大学[18]付属農林専門部教授に任用されることになった。台北帝国大学の在任中台北郊外の文山はもちろんのこと台中、花蓮、高雄など台湾島内、更に海外の海南島まで調査の足跡を残した。家族は現在の台北市古亭町の日本人教員官舎に居を構えた。1943 年に、現在台中にある中興大学の前身[19]である農林専門学校に、創立者の一人として異動した。家族は市内の後龍里の教員官舎に住んだが、長男の恒義は戦争末期の 1945 年 1 月に台中市台中病院で生まれている。

1945 年 8 月 15 日の終戦の半年後に、台湾在住の日本人は台湾を去ることになる。台湾に残り大学教員として働くことも勧められたが、1946 年に故郷の北海道に帰ることになった[20]。帰国後、文部省から静岡大学や鳥取大学での教授職の斡旋があったが、兄上太郎の反対や健康問題、そして何よりも台湾で成し遂げた研究資料の紛失により研究の継続断念を余儀なくされたことが、二郎を北海道にとどまらせ、北海道の農業高等学校で新たに農業教育にかかわることになる。

最初の赴任地の美幌農業高等学校において教頭として三年ほど滞在したあと、名寄農業高等学校の校長に 43 歳の若さで抜擢され、そ

[15] 中山恒義の話によると、面接の際座る椅子が横を向いて置かれており、向きを正さず座り面接を受けたせいで採用には至らなかった、という父親二郎の思い出話を聞いたことがある。
[16] おしゃれで若く見える妻は娘と間違えられたという話があった。実際に妻は五つ年下で、樺太に一緒に赴任したのは結婚して五年目前後の二十代前半である。
[17] たとえば『新撰 北海道史』（1936：100～103）。
[18] 現在台湾大学の前身。
[19] 中興大学のホームページによると、1919 年に日本人により台北に農林専門学校として創立された。1928 年に台北帝国大学付属農林専門部に帰属したが、1943 年に独立して、キャンパスは台中に移されたという。
[20] 基隆港からの引き上げ船で 1946 年 3 月末に神戸港についたとき桜が満開で見事だったそうだ。

の後倶知安農業高校、旭川農業高校の校長を歴任し 60 歳で定年退官になり、晩年は長男家族と同居し平安な生活を送り 78 歳で生涯を終えた。長男の恒義は父親の転任に伴い幼少から高校卒業まで北海道の各地で過ごし、自然への豊かな感受性を培うこととなった。恒義にとって、地方の豊かな自然環境の中で育ったことが、その後の物理学者としての経歴に大きな役割を担っていると感じている。

三、中山二郎と台湾

『台北帝国大学学内通報』に中山二郎の叙任などが以下の通り詳細に記録されている。

- 昭和十三年六月二十二日　任台北帝国大学付属農林専門部教授　叙高等官七等
- 昭和十三年七月十五日　職員住所異動　古亭町二四八　中山二郎氏
- 昭和十三年十月三十一日　学級主任　昭和十三年度農林専門部学級主任左記の通り変更せり　林学科第三学年　教授中山二郎
- ——　農林専門部教授中山二郎氏　修学旅行実地指導並林業調査のため十月二十二火より十日間台南、高雄両州下へ出張
- 昭和十三年十二月十五日　農林専門部教授中山二郎氏　森林経理学実習のため十二月十一日より十日間台中演習林へ出張
- 昭和十四年一月十五日　生徒冬期演習…　第三学年　自十二月十一日至十二月二十日　台中演習林　経理学実習　中山教授
- 昭和十四年四月十五日　農林専門部学級主任 昭和十四年度学級主任左記の通決定　林学科第二学年　中山二郎氏
- ——　農林専門部教授中山二郎氏　森林経理学資料調査の為め四月三日より六日間台中演習林へ出張

・昭和十四年六月三十日　生徒夏季実習　農林専門部に於ては左記の通り生徒の夏期実習の実施の筈…　林学科第二学年　測樹学実習　大平山　自六月三十日至七月十日…　中山教授
・昭和十四年七月十五日　農林専門部教授中山二郎氏　測樹学実習指導のため六月三十日より十一日間台北州下へ出張
・昭和十四年八月十五日　農林専門部教授中山二郎氏　森林経理学資料調査のため八月九日より十一日間花蓮港庁管内へ出張
・昭和十四年十月十五日　農林専門部教授中山二郎氏　台湾山林会大会出席のため十月十三日より五日間花蓮港庁管内へ出張
・昭和十四年十二月十五日　農林専門部教授中山二郎氏　森林経理学実習指導のため十二月十日より十日間台中演習林へ出張
・昭和十五年一月十五日　農林専門部学友会…　ホッケー部部長　中山二郎（教授）
・昭和十五年二月二十九日　学術研究費補助　本学職員中の学術研究に対し財団法人服部報公会より昭和十五年度前期に於ける研究費補助を受けたる人々左の如し　一、台湾に於ける樟林施業経営に関する基礎的研究　中山二郎氏
・昭和十五年三月三十一日　農林専門部教授　中山二郎氏　林業調査のため三月二十日より八日間台東、花蓮港両廳下へ出張
・昭和十五年四月十五日　農林専門部教授中山二郎氏　林業調査のため三月三十一日より十日間台東、花蓮港両廳下へ出張
・昭和十五年四月三十日　農林専門部教授中山二郎氏　演習林事務引継のため四月二十三日より七日間台中、台南両州下へ出張
・昭和十五年七月十五日　農林専門部教授中山二郎氏　生徒修学旅行実地指導のため六月三十日より二十四日間京都、大阪、

兵庫、新潟、奈良、三重、愛知、長野、青森、秋田の各府県及北海道へ出張

・昭和十五年八月三十一日　農林専門部教授中山二郎氏　林業調査のため八月二十五日より三日間台中州管内へ出張
・昭和十五年十月三十一日　農林専門部教授中山二郎氏　修学旅行実地指導のため十月十八日より九日間台南州管内へ出張
・昭和十五年十二月十五日　農林専門部教授中山二郎氏　林業調査のため十一月二十九日文山郡下へ出張同日帰任
・——　農林専門部教授中山二郎氏　森林経理学実習指導のため十二月十日より十日間台中演習林へ出張
・昭和十六年一月十五日　農林専門部教授中山二郎氏　林業調査のため十二月二十四日より十三日間花蓮港廳管内へ出張
・昭和十六年一月三十一日　農林専門部教授中山二郎氏　演習林事務打合のため一月十一日より三日間台中州管内へ出張
・昭和十六年二月十五日　農林専門部教授中山二郎氏　林業調査のため一月二十九日台中州管内へ出張同日帰任
・昭和十六年三月三十一日　農林専門部教授中山二郎氏　演習林事務打合のため三月二十日より三日間台中州下へ出張
・——　学術研究費補助　本学職員中学術研究に対し財団法人服部報公会より研究費の補助を受けたる人々及研究題目左の如し　一、台湾に於ける樟林施業経営に関する基礎的研究　農林専門部教授　中山二郎
・昭和十六年四月十五日　林学科　第一学年　教授　中山二郎
・——　農林専門部教授中山二郎氏　林業調査のため三月三十一日より十五日間花蓮港廳管内へ出張
・昭和十六年四月三十日　農林専門部学術報告　第二号は昭和十六年三月発行せり　（内容）　クスノキ樹幹断面積竝材積に及ぼす各種横断面積測定法の誤差率に就いて　中山二郎
・——　農林専門部教授中山二郎氏　演習林事務打合せのため四月二十三日文山郡下へ出張同日帰任

・昭和十六年五月十五日　農林専門部教授中山二郎氏　林業調査のため五月四日より二日間文山郡下へ出張
・昭和十六年六月十五日　農林専門部教授中山二郎氏　演習林事業監督のため五月二十七日より四日間台南演習林へ出張
・昭和十六年六月三十日　農林専門部教授中山二郎氏　演習林事業監督のため六月十四日文山郡下へ出張同日帰任
・昭和十六年七月十五日　農林専門部教授中山二郎氏　演習林事務打合せ及林学実習指導のため七月一日より十日間台中市及同演習林へ出張
・昭和十六年七月三十一日　農林専門部教授中山二郎氏　演習林事務打合のため七月十一日文山郡へ出張同日帰任
・昭和十六年八月十五日　農林専門部教授中山二郎氏　演習林事業監督の為八月六日より二日間台北演習林へ出張
・昭和十六年十月十五日　農林専門部教授中山二郎氏　演習林事業監督のため十月二日より二日間台北演習林へ出張
・昭和十六年十月三十一日　農林専門部教授中山二郎氏　森林経理学実習の為十月二十一日より八日間台中演習林へ出張
・昭和十六年十一月十五日　農林専門部教授中山二郎氏　演習林事務打合のため十一月九日より、五日間台中、台南両州管内へ出張
・昭和十六年十二月十五日　農林専門部教授中山二郎氏　演習林事務打合のため十一月二十九日文山郡下へ出張
・昭和十七年一月十五日　農林専門部教授中山二郎氏　演習林事務打合のため十二月二十七日より三日間文山郡下へ出張
・――　農林専門部教授中山二郎氏　林業調査のため一日十日より三日間台南州下へ出張
・昭和十七年一月三十一日　農林専門部教授中山二郎氏　林業調査のため一月十日より三日間台南州下へ出張
・昭和十七年二月十五日　学研究費補助　本学職員中学術研究に対し服部報公会より研究費の補助を受けたる人々及研究題

目左の如し　一、台湾に於ける樟林施業経営に関する基礎的研究　農専教授　中山二郎氏

- 昭和十七年二月二十八日　農林専門部教授中山二郎氏　演習林事務打合の為二月十四日より二日間台北州下へ出張
- 昭和十七年四月十五日　林学科　第二学年　教授　中山二郎
- 昭和十七年四月三十日　農専教授　中山二郎氏　造林学実習指導の為四月十三日より二日間台北州へ出張
- 昭和十七年五月十五日　農専教授中山二郎氏　演習林に関する事務打合竝林業調査の為五月四日より三日間台中州へ出張
- 昭和十七年六月三十日　農林専門部会　役員左の如し　国防部　乗馬班長　中山二郎（教授）生活部　第八（林二）班長　中山二郎（教授）

上記の、学内通報に掲載された情報によると、台北帝国大学付属農林専門部教授として 1938 年に台湾に赴任した中山二郎は直ちに調査・研究や教育のため、台湾の至るところを頻繁に回った。また、中山二郎のそのような研究、教育活動は日本内地にも足を運んでいた。彼の研究分野の一つである樟に関する研究に対して、1940 年に財団法人服部報功会から研究補助が与えられている。服部報功会の資料によれば、当時この財団の研究資金を受けていた台北帝国大学の教員は数名しかいなかったことからも、その研究の質の高さがうかがえる。しかも、『台湾日日新報』（1941.3.18）にこの研究補助の記事は掲載されている。北海道には樟がないので、中山の樟関連の研究は台湾に来たことがきっかけだと思われる。実は台湾の樟を利用して樟脳を製造する活動は清の時代にまでさかのぼることができる[21]。その活動は経済的な利益が高く、研究に値するものだった[22]。

[21] 台湾大学森林環境暨資源学科のホームページによる。また、林（1997：ⅰ）にも「茶、糖、樟腦是 1860 志 1895 年間臺灣的三大出口品，其出口值共佔同時期全臺出口總值之 94%。在臺灣於 1860 年以後對外開放淡水、打狗（今高雄）兩大通商口岸至 1895 年臺灣割日期間，茶、糖、樟腦取代原來的米、糖成為臺灣的出口大宗，臺灣的貿易對象也由之前的以中國大陸為主，轉而拓及全球。」とある。なお、台湾の小学校の教科書である『国民小学 社会 5 下』（王淑芬他・教育部審定（2007：56）、翰林出版）にも関連のことを引用している（ただし、引用された前掲林（1997）の作者名を「林満江」と間違えている）。一方、日本の資料として、新渡戸（原版 1910（三版 2001：

現在台湾大学付属図書館に所蔵されている『台北帝国大学付属農林専門部 学術報告』第二号に中山二郎の「クスノキ樹幹断面積並材蹟に及ぼす各種横断面積測定法の誤差率に就いて」が含まれている。また、『マレー地方の林業と林産物』という社団法人台湾産林会が昭和十七年に発行した、百ページを超える単行本も見られる。この本の「自序」に「余は今般文献に依ってマレー半島、北ボルネオ、サラワク等の林業状態に就いて調査する機会を得、概略乍ら取纏めたるを以て本書を編纂した次第である」とある。他に、中山が海外調査に携わったものとして、「海南島に於ける森林調査、特に造林地に於けるパラゴム及広東油桐並に天然生クリカシ、松類の生長経路に就いて」という報告が、台湾総督府外事部が昭和十九年に出した、昭和十七年度の『台北帝国大学第二回海南島学術調査団報告書』で見られた[23]。

また、『台北帝国大学一覧』では、中山二郎のことは「林政学・農林管理学・農林経理学及実習森林数学及実習・林学特別演習　林学士　中山二郎　北海道」(昭和十三年)、林政学・農林管理学・森林経理学及実習森林数学及実習・林学特別演習　林学士　中山二郎　北海道」(昭和十四年)、「森林評価学・測樹学・森林経理学及実習英語・林学特別演習　林学士　中山二郎　北海道」(昭和十五年)、「森林評価学・測樹学・森林経理学及実習・英語・林学特別演習　林学士　中山二郎　北海道」(昭和十六、十七年)と掲載されており、当時教授された科目を示していると思われる。

昭和十三年七月十五日の学内通報に載せられた情報の通り、台北帝国大学付属農林専門部に所属していた中山一家は帝国大学に近い

229))に「そこで児玉総督、後藤民政長官時代に島内も静謐となったに付けて、愈々殖産時期に達したが、何が一番見込があらうかと調査をした所が、目立つものは先ず米か、砂糖、樟脳、茶である」ともある。他方、黄(2000)は日本の台湾統治初期に日本がイギリス、ドイツと台湾の樟脳の問題でもめていたことを中心に研究しており、「台湾樟脳貿易」が1860年代より発展したとも述べている。

[22] 日治時期以前については林(1997)が詳しい。日治時期の資料なら、たとえば『台湾における有用植物』(1920)に樟脳は含まれている。また、1903年に台湾総督府専売局が『台湾樟脳局事業第一年報』、1924年に台湾総督府史料編纂委員会が『台湾樟脳専売志』を刊行した。

[23] 水戸野武夫との共著である。

古亭町にある官舎[24]に住んでいた。この家を、台湾人を含む教え子がよく訪れていたそうだ。中山恒義は母親や当時まだ子供であった姉の弘子[25]の思い出話からその話を聞いている。“官舎には、北は北海道から南は沖縄まで各地出身のいろいろな人たちが住んでいた。中には子供たちに敬礼をさせ軍国教育を行なっていた家族もあった。夫人達の中では隣組という小集団が形成されていた。母親の冨美は、隣家の年配の教授夫人に多くのことを指導いただき、母のように慕ったとのことである。台湾において大きく人間として成長した。”と母親は晩年に述懐している。まるでわれわれが昨今見た人気ドラマ『白い巨塔』[26]で見られる夫人間（ドラマでは「紅会」という）やサラリーマンの社宅の人間関係の日本領台版という印象を受けたが、各地からの出身者が生活を助け合う姿も浮かび上がってくる。

一方二郎は、研究活動ばかりでなくテニスを興じたり、芝生上でプレイする英国式ホッケーの部長として学生を指導していたことも学内通報の情報で分かる。

1943 年に、台北帝国大学付属農林専門部は、一つの独立した学校（現在中興大学前身）として、キャンパスを台中に移された[27]。中山一家も台北を離れ、台中市の後龍里に住むこととなった。台中は中山二郎にとって決して馴染みのない町ではない。台北帝国大学付属農林専門部に所属していた時期、何回も調査などで行っていた。台中に移って間もない 1945 年 1 月に中山恒義が生まれた。台中の記憶がほとんどない中山恒義であるが、母親の冨美から彼が生まれた時の状況を聞いている。父親の二郎が兵隊で徴用されていたため母と姉の弘子が家にいたが、出産の時は母親一人でリヤカーに布団を

[24] 古亭区は現在台北市にあり、「古亭」という駅やバス停の名前も使われている。
[25] お姉さんの弘子は中山恒義より九つ年長である。
[26] 山崎豊子原作の小説が日本で何回も映像化されているが、その中の 2003 年に放送された連続ドラマは台湾でもケーブルテレビで上演され、話題を呼んだ。また、小説の方も台湾の商周出版社により 2004 年に中国語訳本が出版されている。
[27] ちなみに、中興大学に「教授　中山二郎　男（性別）　三八（年齢）　北海道（籍貫）」そして台北帝国大学に勤めた略歴と専門、給料を明記した「学校教職員名簿」が保存されている（『興大週報』123 に写真が掲載）。

積み台中病院に向かった、ということを母親から聞いた[28]。また、当時台中市には米軍の空襲も頻繁になされ、空襲から慌てて防空壕に逃げる時に、当時まだ一歳にも満たない恒義だけを部屋に置き忘れ、避難したこともあったという。そして機関銃からの銃弾が家を貫通したこともあったという。

空襲の危険を避けるため終戦の直前に、中山家は恒義とともに大学の演習林に疎開した。演習林はことのほか美麗で、はるか山の下にある谷川に毎日のように降り洗濯をした。中山恒義は、2007年中興大学を訪問した時、大学の案内で農学部付属演習林を訪れ、母からの話を再確認した。このようなことからも終戦前の生活の一端がうかがえよう。台中に来てからは、台北時代のような複雑な人間関係がない[29]ので随分ラクだった、とも母親が述べたという。

母親の冨美は大変な世話好きであったため、多くの学生に慕われ中山家には訪問者が絶えなかったという。恒義の姉の弘子は当時を思い出し、どうして他人ばかりに親切にするのか子供心に不満に思っていたらしい。恒義は、母親の世話好きな性格を、父親が農業高校の校長をしていた時よく若い先生方の世話をしていたことから思い出す。現代の日本では人間関係がドライになりこのような先生や上司との関係は少なくなった。恒義は2008年12月に台湾大学を訪問にした時、国立台湾大学のL教授の秘書Y嬢の実家（台中の北の苗栗にある）に招かれ素晴らしい接待を受けた。そして、台湾には日本には少なくなった暖かい心が残っていることを知り、心の底から感動したという。

[28] 中山恒義は幼い頃台湾を去って以来、六十数年ぶりの2004年に初めて台湾を訪れ、戸籍に記されている「後龍」を尋ねることを試みた。その時、苗栗にある「後龍」まで行ったが、両親や姉の言うことと異なり、あまりの田舎であったため違う場所だろうと思った。2007年12月の二回目の台湾訪問の際、中興大学の副学長李季眉（ノーベル賞受賞した李遠哲の妹）などの協力により、現在台中市の後龍里（旧称「後壠子」）にある現在の台中病院だとほぼ確認できた。関連のことは『中国時報』（2007.12.13）、『聯合報』（2007.12.13）、『興大周報』（2007.12）などに報道されている。

[29] 日本人が少なかったことや、台中キャンパスに最初に来た一団であったことなどが原因である。

四、帰国後の中山一家

前節（二、中山二郎という人物）で述べたように、中山二郎は帰国後北海道内の地方の高等農業学校の校長を歴任した。中山恒義にとって、父親に対する印象はほとんどこの高等農業学校の校長の姿だという。学術的にはすでに世界的にもおいて高いところに到達している中山恒義は残念そうに、学者としての父親を見た覚えはないと言ったが、内心、戦争で研究を中絶した中山二郎のことを無念に思っているにきまっている。

終戦後の中山恒義は極端な食糧難の中に育った。母親から聞いたところでは、台湾の食糧事情は日本と比べると、パラダイスのようであったという。普段はジャガイモやとうもろこしが主食だった[30]が、5 歳になってはじめて白いご飯を食べた。初めて白いご飯を見た時､喜んで食卓の周りを走り回ったということを母親から聞いた。時期的にはちょうど日本の経済が復興した 1950 年頃にあたる｡姉の好子が台湾から北海道に引き上げてきた時の年齢は 10 歳頃である。弘子は、台湾時代の生活から北海道での生活のギャップを、シンデレラ姫の物語にたとえ､お姫様が灰かむり娘になったようだったと、表現している。台湾時代の記憶がない恒義に比べ、台湾からの引き上げで一番ショックをうけたのは姉の弘子であったそうだ。

五、本研究の意義（おわりに代えて）

日治時期に台湾に来た人の中には、優秀で名高い人材もいれば、その優れた人材にしたがって来た人もいる。その時代に日本で活躍した有名人、たとえば乃木希典、新渡戸稲造、森鴎外らはいずれも日治時期の台湾に滞在したことがある。また、台湾研究などをしている専門家の間でよく知られている者として教育者の伊沢修二（二郎の父林二郎と同じ高遠藩出身）や医学教育で有名な山口秀高などがあげられる。こういった人々は時代に流されることなく、むしろ

[30]それとは対照的に、台湾ではサツマイモがよく食べられた。いずれも地元の安い農産物である。

時代を変えた人なのである。

一方、知名度はさほど高くないかもしれないが、それなりの社会地位を有し、いわば当時の社会の中核をなしていた人の方が人数としては多く存在していた。本稿が取り上げた中山二郎はそのような一人である。中山二郎の一生は変化が激しい時代の縮図のようなものと言える。台湾と縁が深かった彼の人生を究明することを通して、たとえば台湾人日本語学習者の、当時の日本と台湾のそれぞれに対する理解が深くなると考えられる。たとえば、義守大学、台中技術学院、淡江大学、文化大学、銘傳大学や和春技術学院で教材として使われている『国境を越えて』（山本冨美子・工藤嘉名子、（中国語版）致良出版社）に「戦後の社会構造の変容」「戦後の経済構造の変容」などのユニットでは幕末以来の日本の変容に触れられている。本稿が検討した内容はたとえばこのような授業の内容理解と連動していると思われる。また、本研究で利用した資料には、たとえば『台北帝国大学学内通報』『台北帝国大学一覧』など、一見して地味で退屈そうなことをずらりと並べられているものがある。実はこのような公の資料は信憑性が高いので、歴史や人物の追跡研究にたいへん役に立つ。今後これらの資料が関連の研究に利用されるのを期待する。

参考文献（年代順；インターネットの資料は 50 音順）

冯涛編（原版清（1998 现代版））『康熙字典』九州出版社出版

台湾日日新報社（原版 1898～1945（漢珍／まゆに電子版 2007））『台湾日日新報』漢珍数位図書

台湾総督府専売局（1903）『台湾樟脳局事業第一年報』

新渡戸稲造（原版 1910（2001 三版））「台湾に於ける糖業奨励の成績と将来」『新渡戸稲造全集』第四巻、教文館

堀川安市（1920）『台湾における有用植物』台湾図書刊行会

台湾総督府史料編纂委員会編（1924）『台湾樟脳専売志』

北海道庁（1936）『新撰 北海道史』

台北帝国大学（1938～1942 年）『台北帝国大学一覧』
台北帝国大学（1938 年 6 月 30 日～昭和 1942 年 6 月 30 日）『台北帝国大学学内通報』第九十九号～第二九一号
諸橋轍次（1966 修訂版第三刷発行）『大漢和辞典』大修館書店
林満紅（1997）『茶、糖、樟腦業與臺灣之社會經濟變遷（1860～1895）』聯經出版
黄紹恆（2000）『日治初期台灣「樟腦問題」的發生及其意義』国科会専題研究計画（NSC89-2415-H-004-043）報告
日本国語大辞典第二版編集委員会（2001 二版）『日本国語大辞典』小学館
山本冨美子・工藤嘉名子（2005）『国境を越えた』（中国語版）致良出版社
王淑芬他・教育部審定（2007）『国民小学 社会 5 下』翰林出版
中興大学秘書室媒体公関組（2007.12）「興大超級任務 日籍教授來台尋根」『興大週報』123
郝雪卿（2007.12.12）「父曾任教興大 日本教授中山恆義來台尋根」『大紀元』
葉志雲（2007.12.13）「日教授來台尋根 興大助圓夢」『中国時報』
喻文玟（2007.12.13）「日教授尋根 興大協助」『聯合報』
教育部『重編国語辞典』修訂版 http://dict.revised.moe.edu.tw/
サッポロビール株式会社
http://www.sapporobeer.jp/ir_company/history/index.html
『大辞泉』yahoo 辞書 http://dic.yahoo.co.jp
台湾大学森林環境暨資源学科 http://www.fo.ntu.edu.tw/
台湾大学生物資源暨農学部 http://www.bioagri.ntu.edu.tw/
台湾大学生物資源暨農学部実験林管理処
http://www.exfo.ntu.edu.tw/cht/
台湾糖業公司
http://www.taisugar.com.tw/etaipei2/TaiSugar/index.jsp
中興大学 http://www.nchu.edu.tw/New_nchu_3/index.php

中興大学実験林管理処
http://expforest.nchu.edu.tw/forest/html/aboutus_1.html
劉文珍（2007.12.12）「興大超級任務 日籍教授來台尋根」国立教育広播電台文教新聞
http://web.ner.gov.tw/culturenews/culture/culture-detail.asp?id=86681

後記：

中山恒義によれば、中山二郎夫妻は帰国した後もたびたび美しい台湾のことを息子に聞かせたという。恒義は母親が 87 歳で亡くなった時の葬儀の際のあいさつで、二郎夫妻の人生で一番幸せであった時代は、台湾時代の 7 年間であったと述懐している。しかし夫妻は昔の美しい印象を壊さないように、二度と台湾に訪れることはなかったという。また、中山恒義自身は台湾生まれだが、出身地を離れた時あまりに幼かったので、実は台湾のことに関する記憶が残っていない。多忙な大学教授より定年退職し、時間的に前より少し余裕ができ、自ら“帰郷”した。ちなみに、2008 年に台湾で大ヒットした『海角七号』という映画は日治時期にかかわるラブストーリーであるが、本研究で取り扱われているのは実在の人物の物語である。後者も人の心を動かすものであろう。